



GENE TECHNO SCIENCE

Mothers
証券コード:4584

株式会社ジーンテクノサイエンス

バイオで価値を創造するエンジニアリングカンパニー

- Challenge GTS3.0 -

2018年8月22日



- 1. 会社概要**
 - 2. バイオ医薬品とは**
 - 3. GTSの特長・強み**
 - 4. 今後の成長戦略**
 - 5. 最後に**
- (参考資料)**



1. 会社概要

企業理念

当社は、大学発ベンチャーであることの公共性に準じ、利益の追求に留まらず、希少疾患や難治性疾患を対象とする医薬品開発により、人々のクオリティ・オブ・ライフを向上させ、社会に貢献することを経営理念に掲げ、より豊かな医療環境及び社会環境の実現に貢献すべく、企業活動を推進しております。



① バイオ新薬研究

- 高度なバイオテクノロジーを活用して新薬を開発



② バイオシミラー開発

- バイオ新薬の後続品（ジェネリック）を開発



③ 新規バイオ事業 （再生医療）

- 再生医療分野を軸に新しいバイオ技術を開発



会社概要

会社概要	設立	2001年3月		
	上場	2012年11月（東証マザーズ）		
	資本金	106百万円（2018年8月1日現在）		
	所在地	本社	札幌市中央区北二条西9丁目1番地	
		東京事務所	東京都中央区日本橋二丁目10番8号	
		研究所	札幌市北区北21条西11丁目（北海道大学内）	
従業員数	22名（本社5名、東京事務所13名、研究所4名）			
経営体制	取締役	代表取締役社長	谷 匡治	
		取締役	野口 亮	
		社外取締役	栄木 憲和	
	執行役員	事業開発本部長	坂部 宗親	
		研究開発本部長	川上 雅之	
		経営管理本部長	上野 昌邦	
		経営企画部長	栄 靖雄	
主要株主	ノーリツ鋼機株式会社（親会社）			
	ナノキャリア株式会社、JSR株式会社、千寿製薬株式会社、伊藤忠ケミカルフロンティア株式会社			



- ✓ 北海道大学発のベンチャーとして起業
- ✓ バイオの基礎技術の獲得

- ✓ バイオシミラー 1 製品を販売開始
- ✓ 東証マザーズ上場

- ✓ これまでに蓄積したバイオ技術で駆使して新たな価値をエンジニアリング

バイオ新薬研究

2018年7月

ノーステック財団 札幌ライフサイエンス産業活性化事業
事業化支援補助金採択決定

<当該補助金の目的>

産学連携・医工連携によるライフサイエンス分野の研究開発の事業化を促進し、
札幌市の産業を活性化することが目的



研究内容 『受容体調整タンパク質に対する抗体による難治性疾患治療用抗体医薬品の開発』

- 信州大学 医学部循環病態学教室の新藤隆行教授との共同研究
- 潰瘍性大腸炎等の難治性自己免疫疾患の治療や癌転移に関わる分子を発見
- 補助金の助成を受けて、上記分子を標的とした治療薬の開発を行う
- 既存の治療薬とは作用メカニズムが全く異なる事から、これまでの薬で効果が得られなかった患者様、
また治療薬が存在しなかった患者様にも薬を提供できる可能性がある



2. バイオ医薬品とは

バイオ医薬品とは

- 遺伝子組換えや細胞融合などの高度なバイオテクノロジーを活用して作られた医薬品の総称
- 元々人間の体内にあるタンパク質（ホルモン、酵素、抗体等）を使って薬を作るため、からだに優しく、がん等の難病に対して治療効果が期待できる

ウィルス性肝炎の治療薬 インターフェロン

肝炎ウィルス細胞に作用し、増殖を防ぐ効果がある。



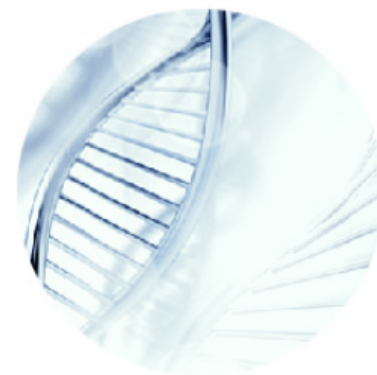
糖尿病の治療薬 インスリン

血糖値を下げる働きがあることから、糖尿病患者の治療などに用いられている。



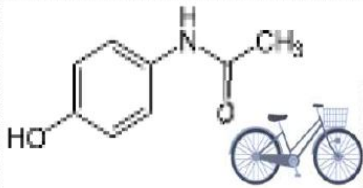
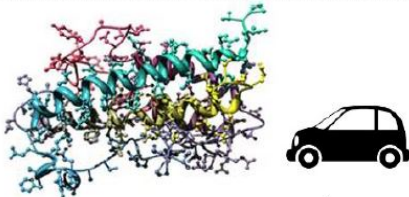
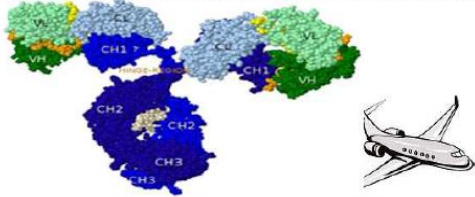

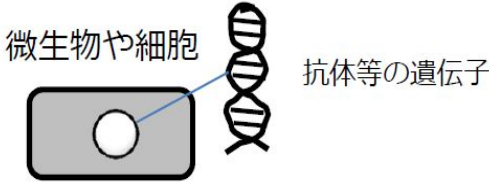
顆粒球増殖因子製剤G-CSF 当社開発品

がん化学療法(抗がん剤投与)を行った後、白血球が減少し免疫力が低下する症状が出るが、この白血球を増殖するための製剤。



バイオ医薬品と一般的医薬品の違い

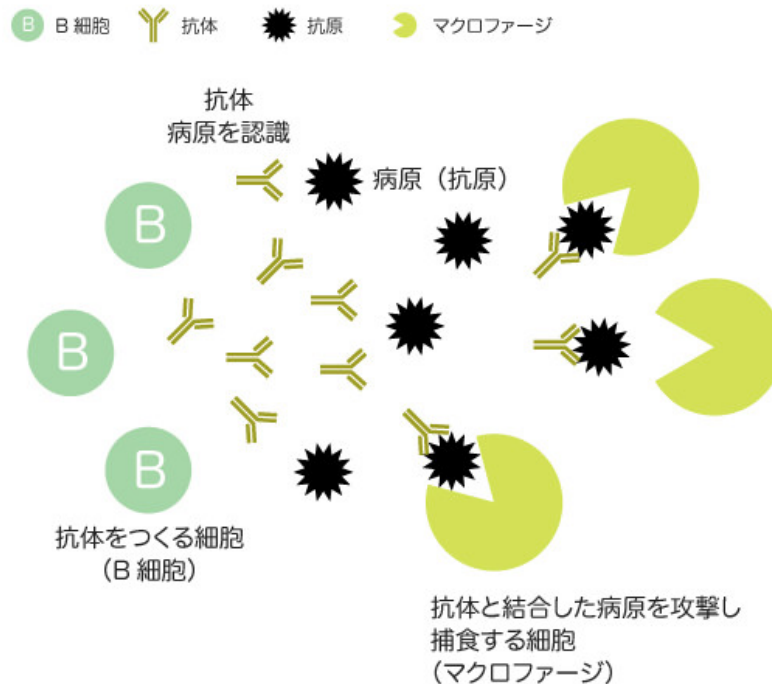
- 化学合成にて作る一般医薬品（決まった形がある）に比べて、バイオ医薬品は微生物・細胞などの生物がつくりだすものがもとになるため、その構造は非常に複雑
- バイオ医薬品は遺伝子組み換え技術・細胞培養技術を活用するため、製造は困難

	一般的な医薬品	バイオ医薬品	
大きさ (分子量)	100~	約1万~ (ホルモン等)	約10万~ (抗体)
大きさ・複雑さ (イメージ)			
製造法 (イメージ)	化学合成 	微生物や細胞の中で合成 	
生産	安定	不安定（微生物や細胞の状態で 生産物が変わり得る ）	

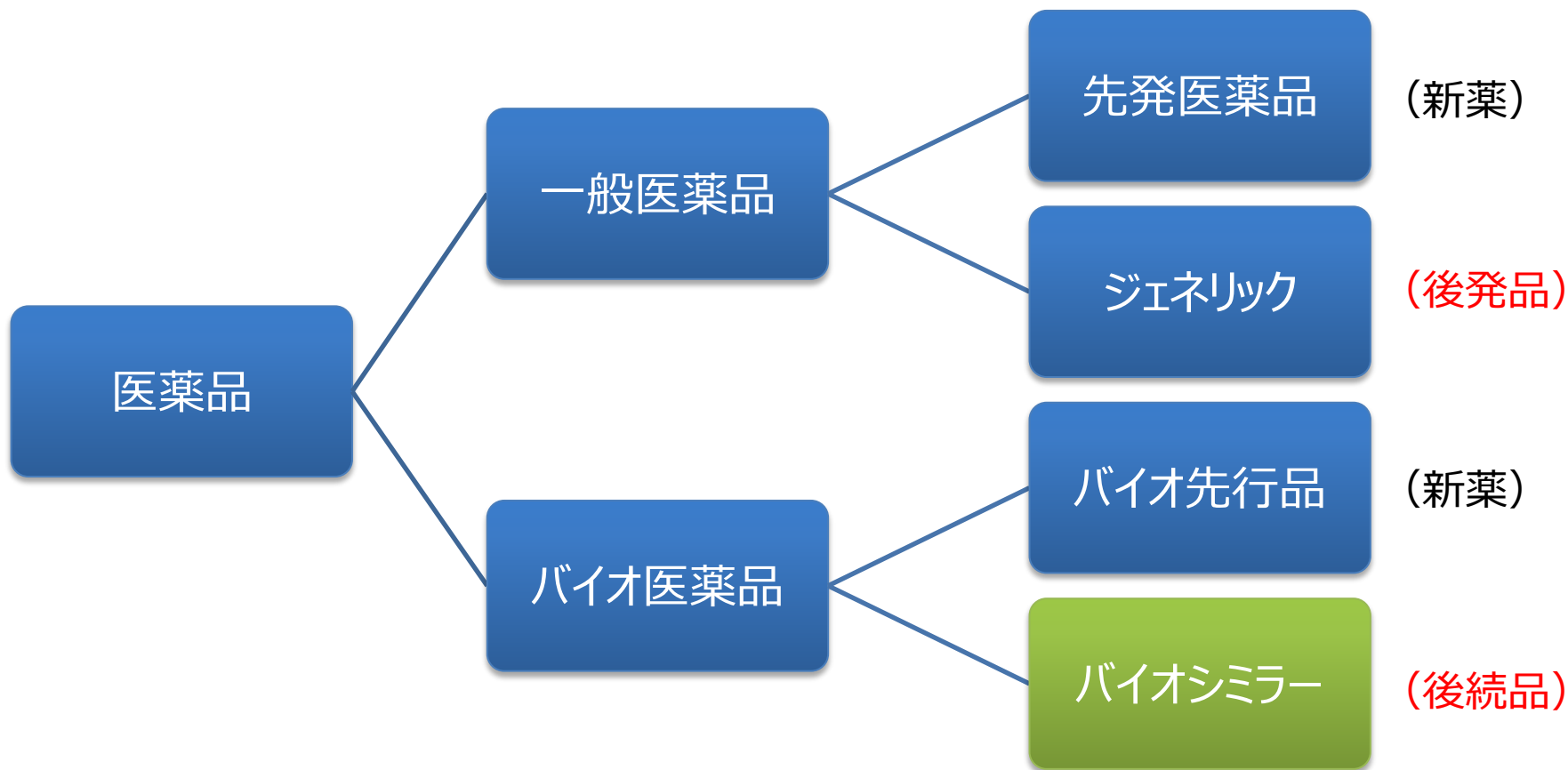
どうしてバイオ医薬品が必要とされるのか

- がん等の難治性疾患において、一般医薬品では得られない治療効果が見込めるため
- 我々の身体に備わる免疫機能（抗体等）を活用して、特定の病原（がん細胞等）だけを攻撃する分子標的薬の研究開発が盛んに行われている
- ジーンテクノサイエンスはこの分子標的薬のうち、抗体医薬品に注目して開発を進めている

抗体の働き方（概念図）



医薬品の主な分類



バイオシミラーとは

- 後続品を開発する場合、バイオ医薬品は大腸菌や培養細胞など生物が生み出すものを主な原材料としているため、先行品と全く同じものを作ることは出来ない
- バイオシミラーは、新薬として承認を受けた先行品と同等・同質の有効性、安全性を有することが動物試験・臨床試験で確認された医薬品
- 一般的なジェネリックは、先発医薬品と同じ構造であれば、臨床試験を必要としないが、バイオシミラーは新薬並みの臨床試験が求められる（＝確かな有効性と安全性を保証）

新薬



新薬の申請資料には、製法・品質・臨床試験について7種の資料を提出しなければなりません。

後発医薬品



後発医薬品の場合、約3種類の提出で申請が完了します。

バイオシミラー



バイオシミラーの申請資料には、新薬とほぼ同等の資料を提出する必要があります。

バイオシミラーの社会的必要性

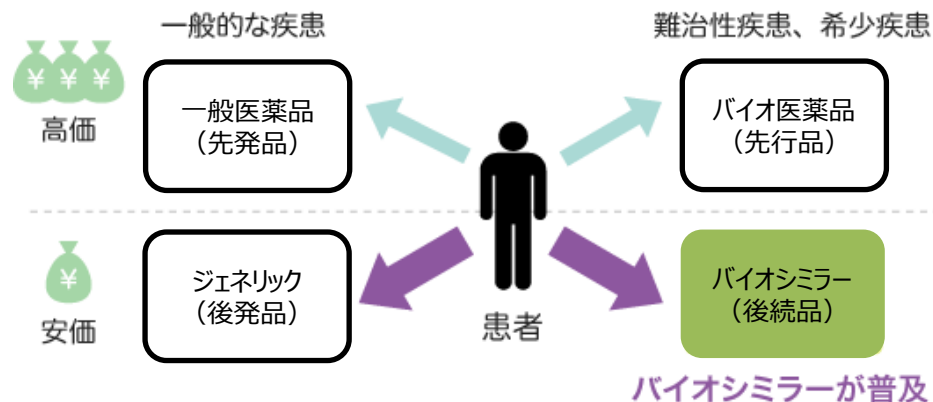
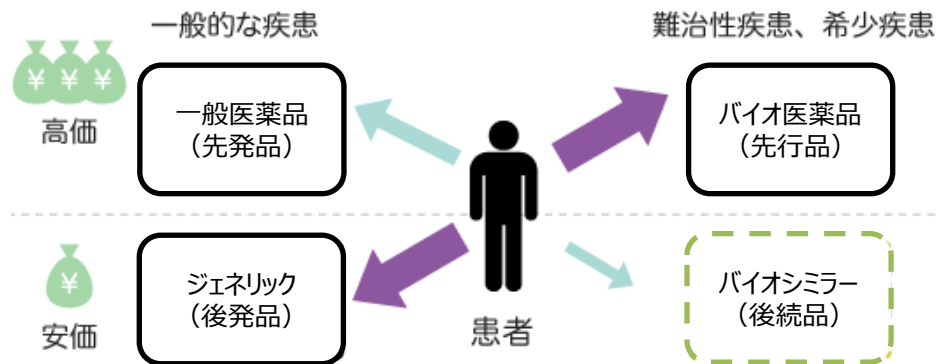
疑問点：ジェネリックが着実に普及する一方で医療費が減少しないのは、なぜか？

理由：高価なバイオ医薬品が使用されることでジェネリック医薬品への切替えの効果が帳消しにされている

現状



理想



- バイオ医薬品は医療費負担が大きい
- ジェネリックが普及しても高価なバイオ医薬品の使用も増えているため、社会全体としては大きな医療費削減効果は得られていない



- 医療費負担軽減
- 医療費軽減により多くの患者様が高度な医療を受けられる
- 我が国の医療財政の圧迫を軽減

医療費抑制の切り札 = “バイオシミラー”です!!



3. GTSの特長・強み

安定と成長

①ハイブリッド事業体制

リスク少なく
着実な開発

②バーチャル型の事業開発

豊富な経験で
多彩な開発

③プロジェクトマネージメント力

①ハイブリッド事業体制

バイオシミラー・バイオ新薬・新規バイオ事業 を加えたハイブリッド事業体制

バイオシミラー事業

- ・原薬の開発と供給
- ・製薬企業とのアライアンス

事業安定化と早期収益化を図る



バイオ新薬事業

- ・抗体医薬を中心とした研究開発
- ・北海道大学創成研究機構に研究所

高い成長性を目指す

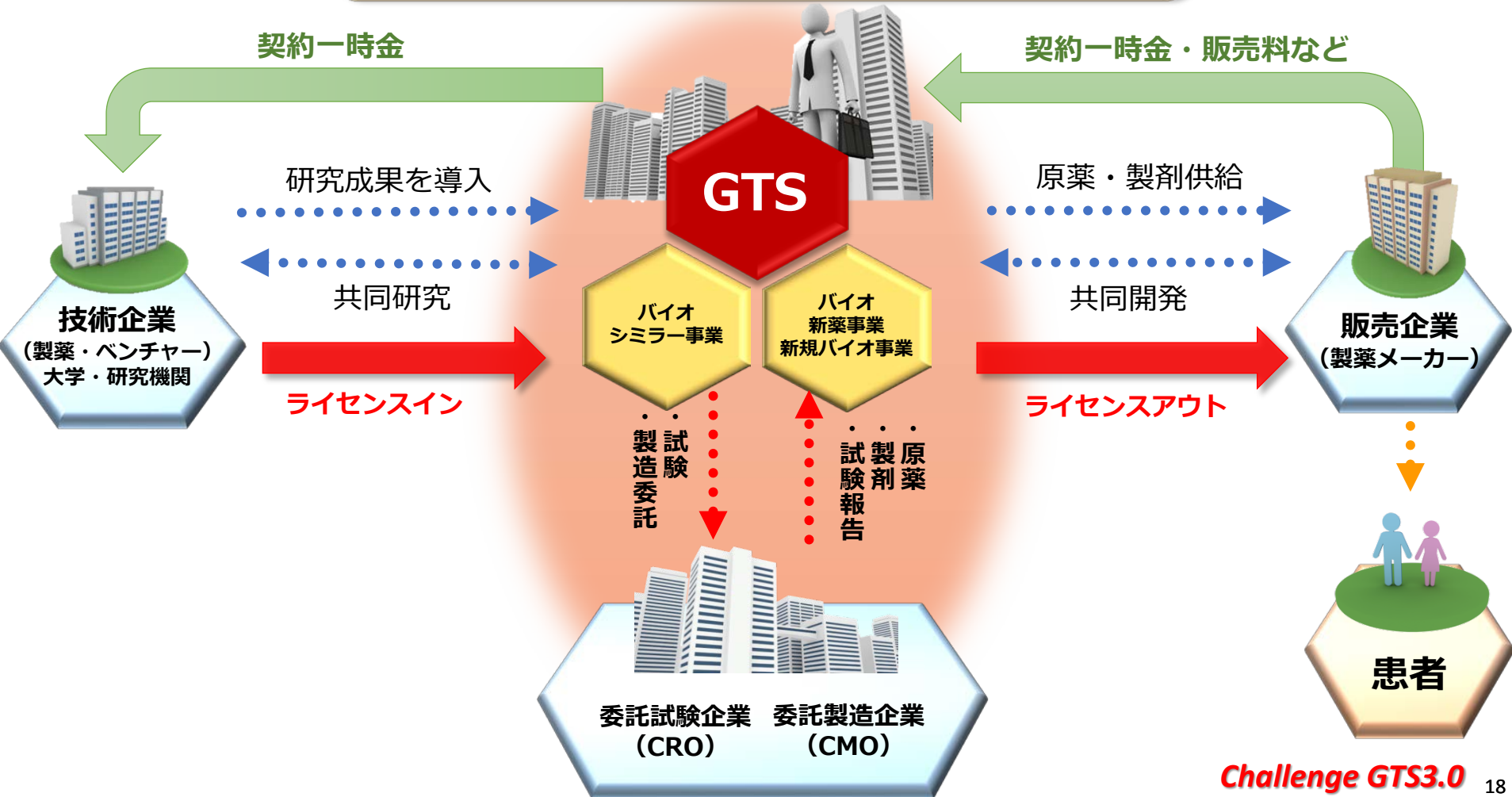


新規バイオ事業 (再生医療)

②バーチャル型の事業開発

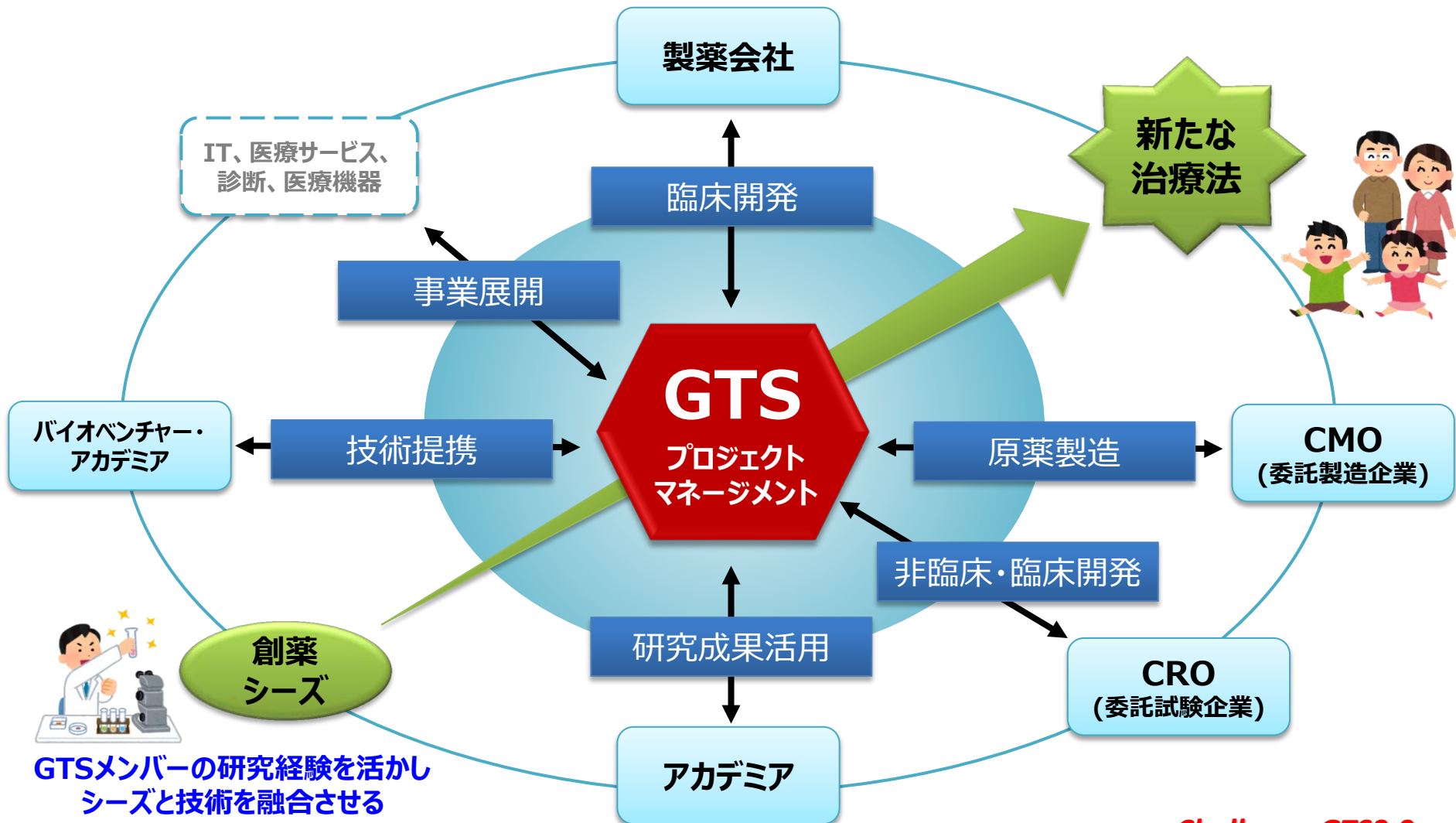
バーチャル型事業体制の特長

- 1) 融通性：プロジェクト毎に最適な協働体制を構築
- 2) 迅速性：プロジェクト開始・計画変更等に迅速に対応
- 3) 投資リスク：製造設備など多額の設備投資を回避



③プロジェクトマネージメント力

➤ これまでの事業経験からプロジェクト毎に最適な体制を構築し、価値の最大化を図る



GTSメンバーの研究経験を活かし
シーズと技術を融合させる

GTSの保有技術・提携技術・ノウハウ

- ☆ バイオ医薬品の研究開発・製造販売承認申請等の経験・ノウハウ
- ☆ 生物学的評価技術：細胞培養技術/細胞評価技術/病態動物モデル作成評価技術
- ☆ 薬効・薬理・安全性評価



☆ **高性能モノクローナル抗体作製技術**
高特異性・高親和性抗体取得技術

☆ **高機能抗体技術**
抗体薬物複合体（北大・国プロ）/DDS

☆ **細胞治療プラットフォーム技術**
研究開発レベル&薬事・事業化レベルの基盤技術・ノウハウ蓄積
幹細胞の培養・保存技術、薬効評価、品質評価、マーカー探索技術（JRM、順天堂大学との共同研究開発）

☆ **業務提携・共同研究開発経験**
北海道大学・札幌医科大学・信州大学・順天堂大学・国立がんセンター等
オルソリバース・JRM・ナノキャリア・chromocenter 等

☆ **バイオ医薬品タンパク質高発現化技術**
人工染色体技術、リフォールディング技術等

創薬テーマ

技術テーマ



4. 今後の成長戦略

GTSを取り巻く環境



医薬品市場

競合状況

- 政府による医療費低減のための後発医薬品普及促進策の策定・施行
- バイオシミラー協議会による普及促進活動
- バイオ医薬品の売上シェア向上
- 罹患者数の多い疾患に対する医薬品は飽和傾向にあり、希少性・難治性疾患、小児・若年性疾患への需要が高まる

- バイオシミラー版オーソライズドジェネリックの承認
- 薬価改定
- 儲かる疾患領域への集中化による競争激化
 - ① 海外大手製薬企業の参入
 - ② 臨床開発の大規模化
 - ③ 承認プロセスの厳格化

研究開発

- 先駆け審査指定制度の施行に伴う、新薬承認審査期間の短縮
- 個別化医療へのトレンド移行に伴い、投資効率重視の研究開発時代へ
- 新規医療シーズの探索力が重要視される

- 優良人材の採用難
- 厳しい資金調達環境

2019年3月期 第1四半期業績

◆ 2019年3月期 第1四半期業績

	売上高 (百万円)	販売費及び一般管理費 合計	内 研究開発費	営業利益 (百万円)	経常利益 (百万円)	四半期 純利益 (百万円)	1株当たり 四半期純利益 (円) ※
2019年3月期 4月～6月実績 (A)	273	251	(141)	△55	△62	△108	△5.69
2018年3月期 4月～6月実績 (B)	171	213	(104)	△118	△114	△115	△6.02
増減額 (A - B)	102	38	(37)	63	52	7	
(参考) 2019年3月期 業績予想値	1,060		1,300	△1,180	△1,180	△1,182	

主なポイント


- フィルグラスチムバイオシミラーは、計画どおりの売上高を達成
- 開発進捗に伴うマイルストーン収益も含む

- 研究開発費は主にバイオシミラー事業の推進に支出
(開発は順調に進捗)

- 退任取締役に対する特別功労金
45百万円計上
(特別損失)

※2018年7月1日付で株式1株につき2株の株式分割を行っておりますが、2018年3月期の期首に当該株式分割が行われたと仮定して1株当たり四半期純利益を算定しております。

バイオシミラー事業

開発番号	対象疾患	開発研究	臨床試験（治験）		申請・審査 承認・上市	提携先
			第1相	第3相		
GBS-001 フィルグラスチム	がん					富士製薬工業(株) 持田製薬(株)
GBS-004 ペバシズマブ	がん					
GBS-005 アタリムマブ	免疫疾患					
GBS-007	眼疾患					千寿製薬(株)
GBS-008 バリビズマブ	感染症					
GBS-010 ベガフィルグラスチム	がん					
GBS-011 ダルベポエチンアルファ	腎疾患					(株)三和化学研究所
GBS-XXX 新規バイオシミラー						
GBS-YYY 新規バイオシミラー						
⋮						

バイオ新薬

開発番号	対象疾患	基礎研究	開発研究	臨床試験(治験)			申請・審査承認・上市	提携先
				第1相	第2相	第3相		
GND-001 <small>抗ヒトα9インテグリン抗体</small>	免疫疾患、がん						科研製薬(株)	
GND-004	眼科疾患、がん						導出活動中	
GND-007	免疫疾患							

新規バイオ事業 (再生医療)

開発品	対象領域	基礎研究	臨床試験(治験)	条件・期限付き承認※	市販 (市販後に有効性、更なる安全性を検証)	承認	継続して販売	共同研究企業・大学等
心臓内幹細胞	心機能の改善							(株)日本再生医療
免疫寛容誘導	自己免疫疾患 臓器移植、アレルギー							順天堂大学
骨髄間葉系幹細胞	糖尿病性腎症							札幌医科大学 株式会社ミネルヴァメディカ

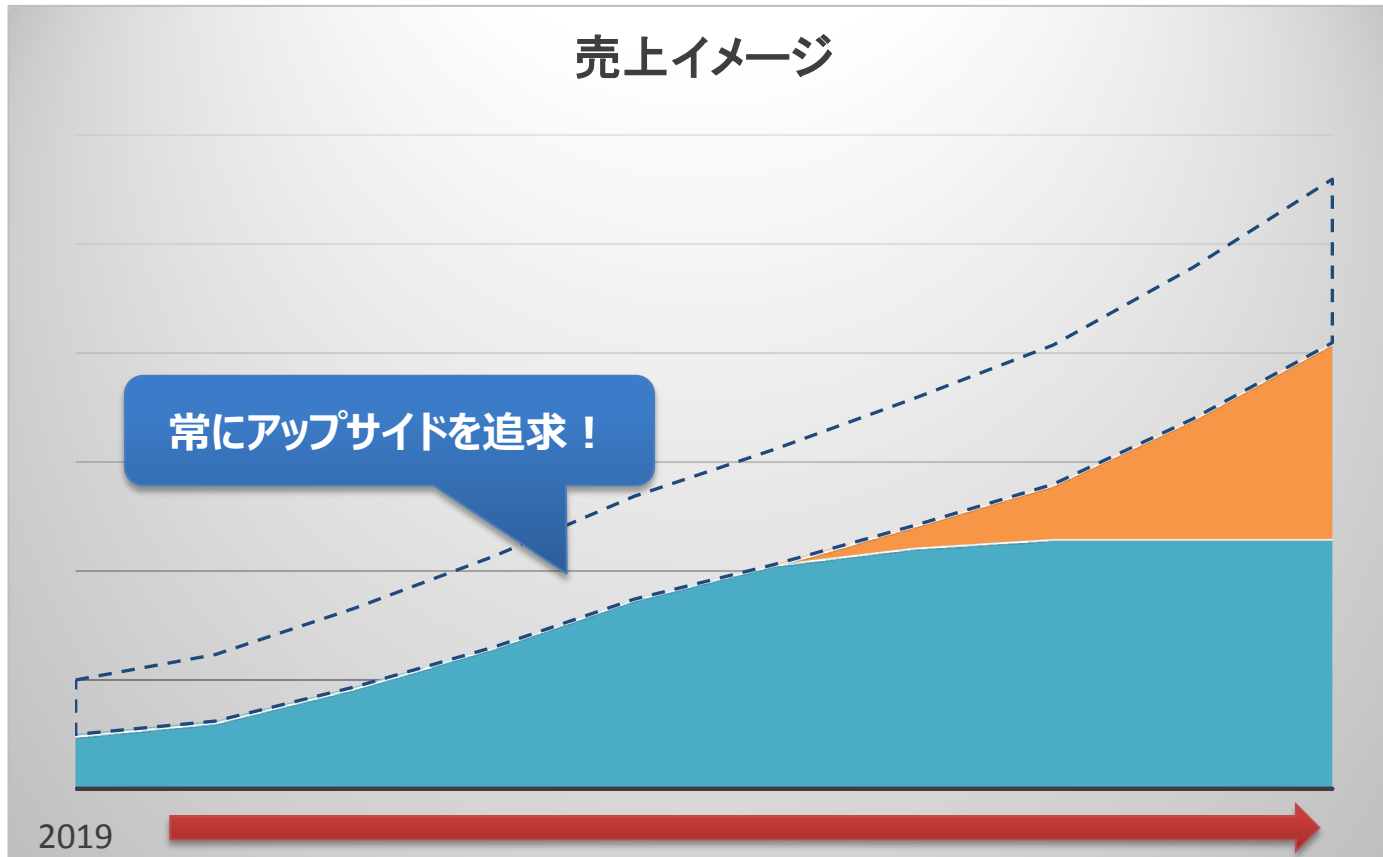
※再生医療等製品の早期実用化に対応した承認制度
患者にリスクを説明・同意を得て、先行して使用し、市販後の安全対策を講じる。

中長期の事業基盤を構築する

具体的施策

- 既存パイプラインの着実な開発推進による売上計画の達成
- 事業基盤強化に向け、新規パイプラインの着実な開発と上市
- 海外導出の推進

売上イメージ



海外導出による
アップサイドポテンシャルの
追求

新規パイプラインによる
売上積み上げ

既存パイプラインの
着実な売上貢献

GTS 3.0

バイオで価値を創造する
エンジニアリングカンパニー

治療法が不十分な疾患に対する
医療を提供し、新しい領域を開拓する

—患者、家族、介護者を含め、包括的なケアを目指して—



GTSの注力領域

- ❖ 小児疾患（若年性疾患含む）
- ❖ 希少疾患
- ❖ 難病
- ❖ アジアの疾患

バイオシミラーが創出する資金を活用しながら、
バイオ新薬・新規バイオ事業に向けての経営資源のシフトを加速化

医薬品・ヘルスケア市場のトレンド

- 罹患者数が多数の疾患から、より細分化された疾患へ
- ブロックバスター製品（世界年間売上高1,000億円以上）から個別製品へ
- 世界の医薬品市場規模は100兆円以上へ

ビタミン剤・抗生物質

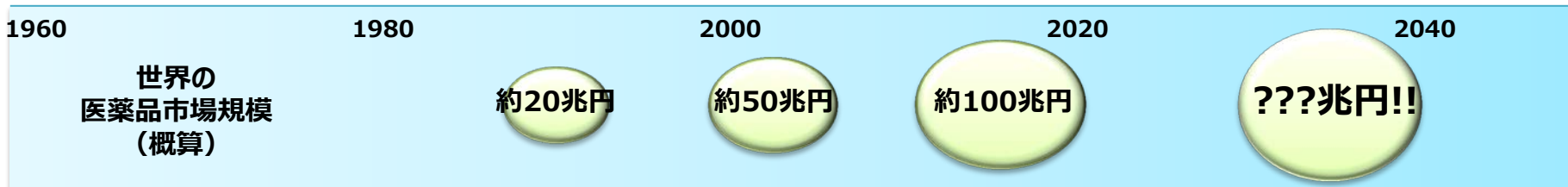
消化性潰瘍薬・生活習慣病薬

自己免疫疾患、免疫調整剤

抗がん剤・中枢神経系薬剤

難病・希少疾患

小児・若年性疾患



罹患者数が多数の疾患
ブロックバスター製品



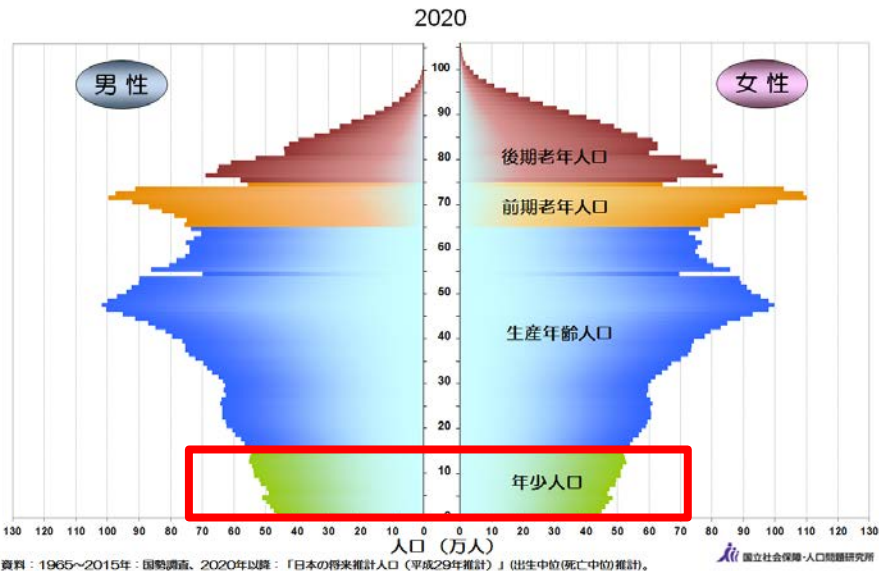
疾患の細分化
個別化医療

- 個の医療の重要性がより高まる
- これまでなおざりな傾向にあった難病、希少疾患、そして小児疾患の研究開発がより着目される

小児疾患のポテンシャル

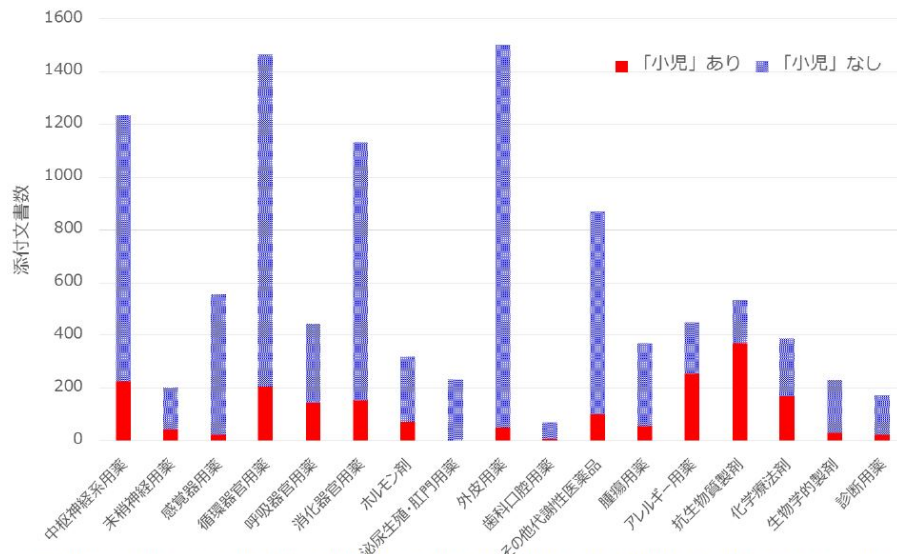
－小児・若年層の医療の充実を図る重要性－

日本の人口ピラミッド



出典：国立社会保障・人口問題研究所ホームページ
(<http://www.ipss.go.jp/>)

添付文書でみる小児適用取得数



平成27年5月現在。PMDA医療用医薬品情報検索で「効能又は効果／用法及び用量」に「小児」を含むものをカウント

出典：独立行政法人医薬品医療機器総合機構ホームページ
(<http://www.pmda.go.jp/>)

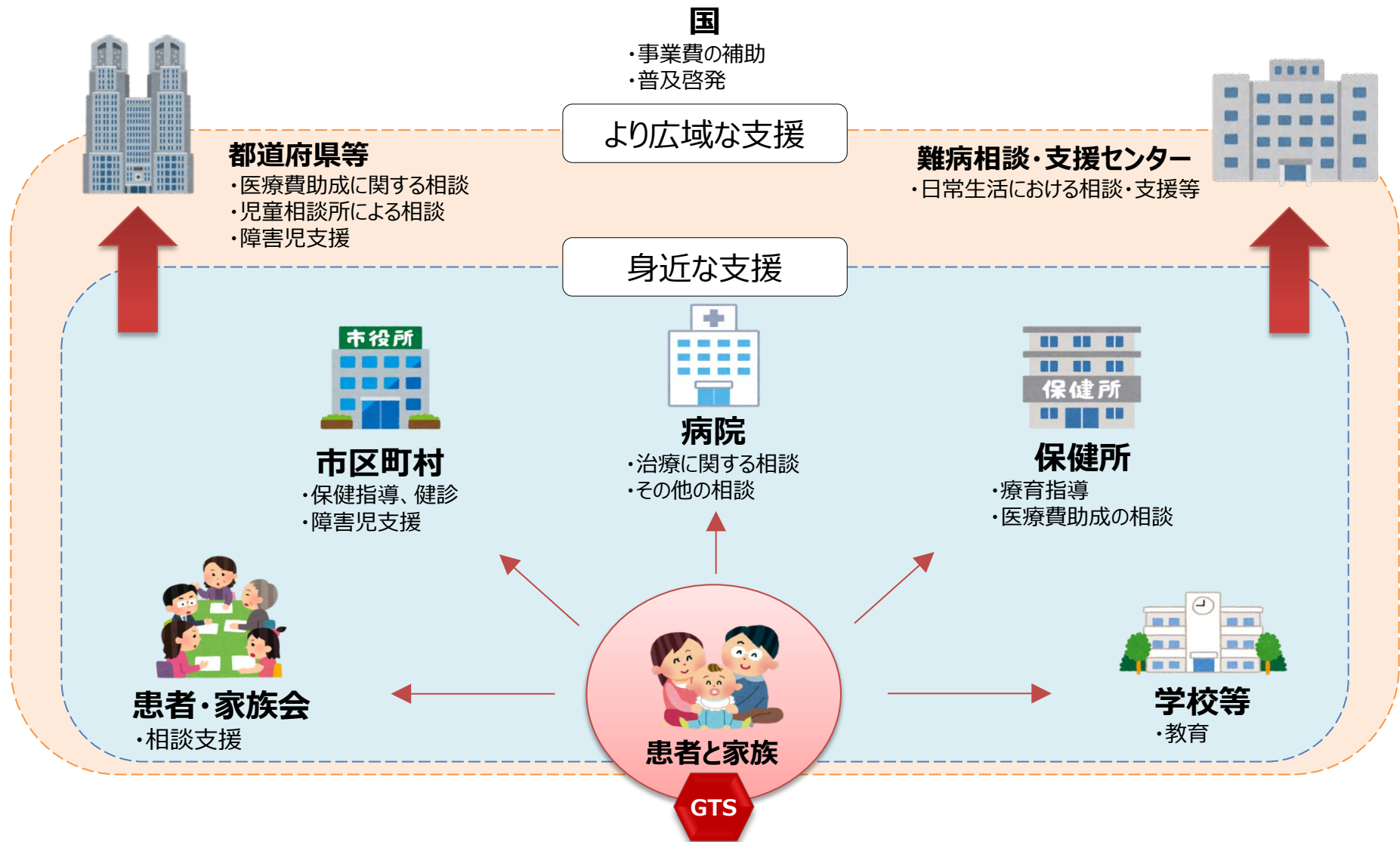
- 日本含め多くの国々で人口は逆ピラミッドを示している
日本の場合、総人口に対する年少人口（15才未満）の割合は約12.5%であり、著しく低下している
- 将来の日本や世界の経済を支えるべき年少人口の減少は、健全かつ持続可能な社会の維持に警鐘をならすもの

- 医薬品開発でみると、成人向けの製造販売承認は取得されても、小児向けの用法・用量を取得している薬剤は少ない
- 小児疾患（15歳未満）関連の薬局調剤医療費は2015年時点で約5,000億円、日本の全体同費が約8兆円で、約6.25%にあたる
- 添付文書での小児疾患カバー状況を鑑みても、満たされていない患者はいると想定され、市場規模も更にあるものと考えられる



小児患者を取り巻く環境

－全ての当事者を視野に入れた包括的なケアを目指して－



新たな治療法を提供し、患者とその家族や取り巻く支援環境への負担を軽減し、社会に貢献する



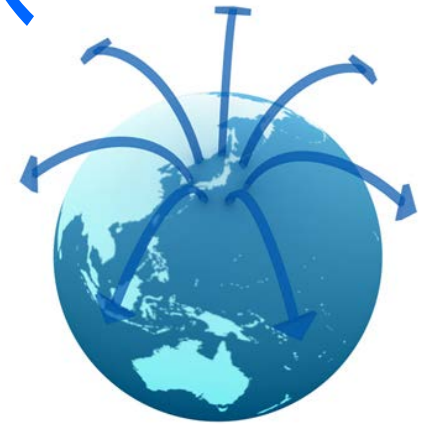
5. 最後に

GTSが目指すところ

我々GTSはこんな思いで、社会へ役立ってまいりたいと考えています!!

1) 日本の優良なバイオ技術を世界へ

日本の大学や研究機関では、様々な優良なバイオ技術の研究開発がなされております。その技術を応用し、製品やサービスを生み出し、日本のみならず広く世界にお届けし、貢献することが、世界の中の日本にとっても大切なことと考えております。



2) 明日の子供たちへ

日本のみならず世界各国で少子高齢化が課題となっております。次の世界を築き上げていくのは、子供たちや若い世代の方々。少子化が進む中、その世代の方々が多くより健やかに社会に飛び立っていくことが大切なことと考えております。そのために、バイオ技術も様々なところで貢献できるものと考えております。





GENE TECHNO SCIENCE

株式会社ジーンテクノサイエンス



バイオで価値を創造するエンジニアリングカンパニー



参考資料

- ① バイオベンチャー業界・会社の特長
- ② 提携事例
- ③ 資金調達に関する資料
- ④ 株価推移

バイオベンチャーのビジネスモデル

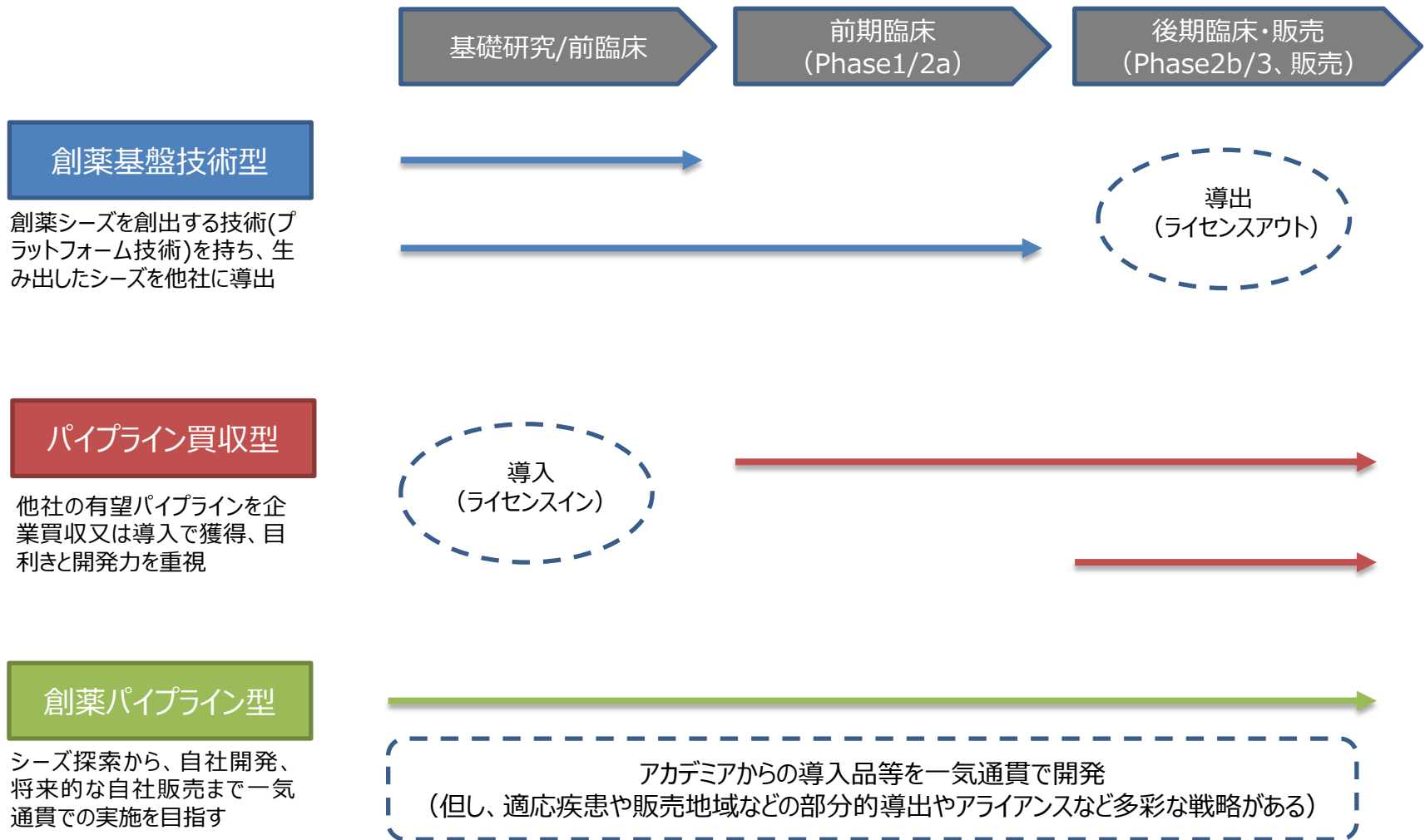
(経済産業省レポート2017/11/15)

新規ヘルスケア領域	概要	国内の上場企業数
バイオテック (創薬型)	医薬品の研究・開発を主とする。パイプラインの開発を進め、最終的に自社の新薬として上市されるか、研究・開発の途中で製薬会社にライセンスアウト（開発権や販売権を他社に供与）するかによって若干のビジネスモデルが異なる。ただ、後者の場合でも、将来的な売上に対する権利（ロイヤルティ）が発生する点で、創薬支援型とは異なる。ハイリスク、ハイリターンで、上場後も赤字が長期継続する点で、下記の2つのタイプや他産業と異なる特性がある。	30社程度
バイオテック (創薬支援型)	独自技術を用い、製薬企業の創薬プロセスの中で独自サービスを展開している。独自のモデル動物や解析技術などを持つ企業が多い。サービスを提供するタイプと、試薬を販売するタイプに大別される。請け負う業務としては、薬物動態分析、安全性試験、遺伝子解析など。創薬型よりはリスクは小さく、早くから黒字化を目指せる傾向にあるものの、バイオテック（創薬型）よりは、ミドルリスク、ミドルリターンの傾向にある。	15社程度
ヘルステック	ヘルスケア（医療）×テクノロジー（技術革新）を短縮してヘルステックと呼ばれているが、多くの場合、従来のヘルスケア技術に情報技術（アプリ、ビッグデータ、スマホ、クラウド、センシングデバイスなど）を組み合わせ、新たな価値創造を目指す企業を指す場合が多い。疾患の治療を目的とするバイオテック（創薬型）に対して、予防や疾病管理などへの寄与が先行する大手企業が事業の一環として参入してくるケースが多く、ヘルステックに比較的特化した国内の上場ベンチャーの数は、現状では少ない。	数社程度



バリューチェーンに応じた創薬型ベンチャーのビジネスモデル

(2018年4月27日 経済産業省発表 伊藤レポート2.0 バイオメディカル産業版)



(注) 実際は1社が1つのビジネスモデルのみに分類されるわけではなく、開発品ごとや企業の成長段階に応じ、柔軟にビジネスモデルを変化させている点には留意が必要

バイオベンチャーの現状と課題

(経済産業省レポート2017/11/15)

- 創薬のパラダイムシフトによるバイオベンチャーの存在感の増加

従来	今後
<p>「大勢の患者に安全な医薬品」を提供するため、医薬品開発は長期化・大規模化</p>	<p>技術発展に伴い、特定患者群に対し、より効果の高い医薬品の提供が可能</p>
<ul style="list-style-type: none"> 研究開発投資「量」が重要 事業規模の大きいメガファーマが有利 	<ul style="list-style-type: none"> 研究開発投資「効率」が重要 小回りの利くバイオベンチャーが開発主体に

- 医薬品開発の変化に応じた規制改革が着実に実行されている
 - 2014年 再生医療等製品における条件および期限付き承認制度の導入
 - 2015年 先駆け審査制度の導入
 - 2017年 医薬品における条件付き早期承認制度の導入

バイオベンチャーの現状と課題

(経済産業省レポート2017/11/15)

- ◆ 創薬型は基本的に赤字先行のビジネスモデル
- ◆ 日本のバイオベンチャーは国内外の機関投資家からの関心が小さい
- ◆ バイオベンチャーの中には資金調達に苦心し、開発の遅延/中止に直面するものもある
- ◆ 上場後バイオベンチャーの時価総額を比較すると、日本は米欧のみならずアジア諸国にも劣る

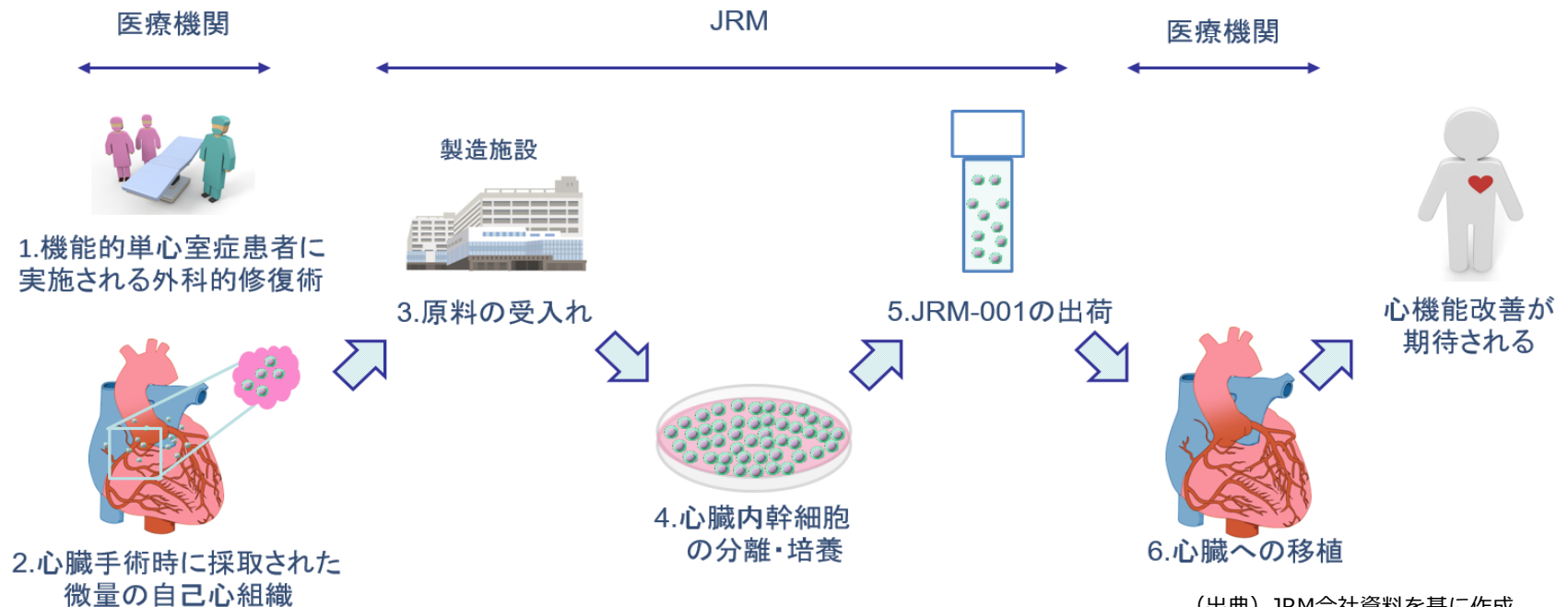
(株)日本再生医療との資本業務提携

ポイント

- JRMが開発中の心臓内幹細胞を活用した研究開発
- 心臓手術時に採取された自己心組織から分離・培養する事で心組織の再生及び心機能の改善が期待されている
- 心臓移植が困難な日本において重篤な心疾患に対する新たな治療法を目指す

<心臓内幹細胞を用いた細胞治療の確立！！>

- JRM-001は、岡山大学附属病院 王英正教授より技術移転を受け開発を進めている再生医療等製品
- 術後約1～1.5ヶ月経過後にJRM-001をカテーテルを用いて心臓の冠動脈に移植することで、心組織の再生及び心機能の改善が期待される



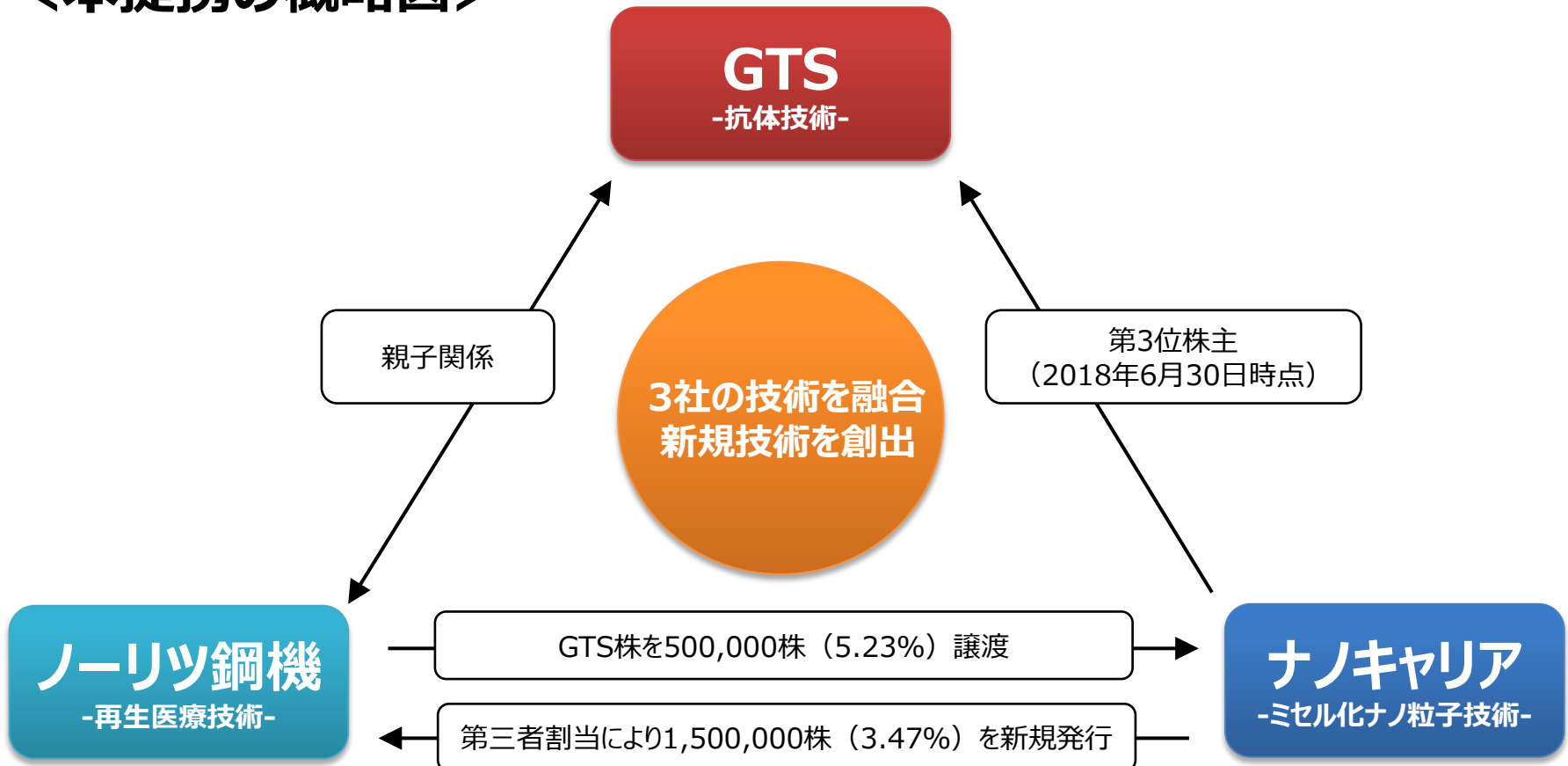
(出典) JRM会社資料を基に作成

ナノキャリア(株)・ノーリツ鋼機(株)との資本業務提携

ポイント

- 3社がそれぞれの強みを持ち寄って、新規バイオ技術の創出を目指す
- ナノキャリアはGTS株を、ノーリツはナノキャリア株を取得し、3社が資本関係を構築

<本提携の概略図>



(株)chromocenterとの共同研究契約締結

ポイント

- ・ **高産生細胞株構築を目指した**基盤技術確立のための共同研究契約締結

chromocenter (クロモセンター) とは??

→人工染色体ベクター、染色体解析等を所有するバイオ関連技術の専門家

▶ クロモセンターが所有する人工染色体ベクター技術を利用し、組換えタンパク質のアミノ酸配列をコードする遺伝子構成体の最適化を行い、バイオシミラーの高産生細胞株を構築することを目指す

<本研究の目的>

① 共同研究

クロモセンターとの共同研究

クロモセンターが所有する人工染色体ベクター技術を導入して、当社の抗体技術と組み合わせる新しい基盤技術確立を目指す

② 基盤技術確立

高産生細胞株がもたらす効果

- ✓ 原薬製造量の増加
- ✓ 製造コストの低減
- ✓ 製造効率化
- ✓ 価格競争力強化
- ✓ 提携交渉の確度UP

③ 競争優位性の確保

バイオ医薬品開発が有利に

開発中のパイプラインや、今後手掛ける新薬やバイオシミラーにも応用することで開発品目の競争優位性を確保

今後の事業推進に向けての資金調達

第6回新株予約権	
対象株式数	1,500,000株（株式分割調整後3,000,000株）
発行済株式総数比	15.68%（平成30年6月1日現在）
発行価額合計	5,955千円
差引手取概算額	3,059百万円
行使期間	2年（平成30年7月2日～平成32年7月1日）
発行方法	大和証券に第三者割当
当初行使価額	2,041円（株式分割調整後1020.5円）
上限行使価額	なし
行使価額修正	各行使請求の効力発生日の直前取引日終値の92%に修正
下限行使価額	1,429円（株式分割調整後 714.5円）
基準株価対比	70%
その他	行使停止、行使の要請（コミットメント）、取得条項、取得請求権、譲渡制限
資金使途	主要事業であるバイオシミラー事業における研究開発への追加投資、既存バイオ新薬の研究開発費用及びバイオ新薬の導入・新規バイオ事業（再生医療）の拡充に係る費用

今後の事業推進に向けての資金調達

資金調達の目的	<ul style="list-style-type: none"> ● 今後の事業推進に向けて、希少性・難治性疾患領域、特に小児領域をターゲットに企業価値をさらに向上していくために必要な資金を確保 <ul style="list-style-type: none"> ➢ バイオシミラーパイプラインの開発の着実な推進 ➢ 高い成長ポテンシャルを持つバイオ新薬事業及び再生医療事業の推進 ● 投資家層の拡大による流動性の向上（株式分割と併せてその効果を最大化） 						
資金調達方針	<ul style="list-style-type: none"> ● 当社の事業計画、手元流動性及び資金需要、さらには株価動向を総合的に判断した上で、行使要請通知及び行使停止要請通知を行うことにより新株予約権の行使に対して一定のコントロールをしながら、柔軟に資金調達を進める ● 資金調達の必要性がなくなった場合には、当社の判断によりいつでも残存する新株予約権を取得し、消却する 						
資金使途	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="415 792 1574 949">1. 既存のバイオシミラーパイプライン（GBS-002～011）のうち3品目に係る製造方法の最終化、商用品の供給に向けた準備、製造販売承認の取得に向けた申請等の準備にかかる費用</td> <td data-bbox="1613 792 1864 949">1,350百万円</td> </tr> <tr> <td data-bbox="415 956 1574 1063">2. 新規バイオシミラーパイプライン1～2品目の製法プロセス開発、品質試験及び非臨床試験にかかる費用</td> <td data-bbox="1651 956 1864 1063">650百万円</td> </tr> <tr> <td data-bbox="415 1099 1574 1206">3. 既存バイオ新薬の研究開発費用及びバイオ新薬の導入・新規バイオ事業（再生医療）の拡充費用</td> <td data-bbox="1613 1099 1864 1206">1,059百万円</td> </tr> </table>	1. 既存のバイオシミラーパイプライン（GBS-002～011）のうち3品目に係る製造方法の最終化、商用品の供給に向けた準備、製造販売承認の取得に向けた申請等の準備にかかる費用	1,350百万円	2. 新規バイオシミラーパイプライン1～2品目の製法プロセス開発、品質試験及び非臨床試験にかかる費用	650百万円	3. 既存バイオ新薬の研究開発費用及びバイオ新薬の導入・新規バイオ事業（再生医療）の拡充費用	1,059百万円
1. 既存のバイオシミラーパイプライン（GBS-002～011）のうち3品目に係る製造方法の最終化、商用品の供給に向けた準備、製造販売承認の取得に向けた申請等の準備にかかる費用	1,350百万円						
2. 新規バイオシミラーパイプライン1～2品目の製法プロセス開発、品質試験及び非臨床試験にかかる費用	650百万円						
3. 既存バイオ新薬の研究開発費用及びバイオ新薬の導入・新規バイオ事業（再生医療）の拡充費用	1,059百万円						



株価推移

—GTS株価 —マザーズ指数



350.25円

916円
(2018/8/21)

(注) 上記株価は上場以後に行われた株式分割を考慮した数値としております。